

ぶろろこす

人目を忍ぶがごとくひっそりと世に出で、流れに浮かぶ泡沫うたかたのごとくたちまちに消えゆくであろうこの小さな無用の書は、その生涯の大半を東西古典詩を読むことに費やしてきた一老骨の、古典詩についての戯書である。

これまでに漫然と読み散らしてきた古き世の詩についての戯評や感想、そのパロディなどを、詩人たちの作品への *resonantia* 「反響」、「木魂」という形で、折にふれ詩に似せて綴ったものがこれである。もとよりこれは「雖多年學古典詩／愧己菲才不裁詩」という身を嘆く老耄書客の筆のすさび、たわむれの閑業にすぎない。近々六道地獄へ下るに際しての冥土への旅の置き土産か、地獄におられる先師蜀山人先生への貧しい手土産にでもと思いつてこんなおかしなものを書いたのは、やはり自制心を失った耄碌の致せるところであろう。

久しく翰墨の風絶えて、読書人が「絶滅危惧種」の希少動物の如きものとなったこの国

では古典詩そのものに親しむ人は少なく、ましてや化石老人のかような戯書を覗く奇特な
人士も稀であろうが、何かの間違いでふと本書を手にしてしまう人もなと、ひそかに願
う心がないでもない。運よくさような百年の知己に出会えたら、あの世でとくとお礼申し
上げるつもりである。

零和忘年初秋

枯骨閑人改め恍惚慘人 井伊華言

序詞

遙か彼方の遠い過去から響いてくる詩人たちの声、

「現代に生きる古代人」たるわたしは生涯ひとえに

それに耳傾けて生きてきた。生を厭い、世を拒む男は、

化石と嗤われつつ、遙かな過去の世界に居場所を求めた。

末世に生きる東洋人の男が、ギリシア詩に心惹かれるのは、

或いは前世のわたしがギリシア人だったからかもしれないな、

或いは彭沢の村で陶淵明が吟ずる詩に聞き入った農民だったか、

それともみやび男おを気取って、多情の女ひと和泉式部に胸焦がしては、

下手な歌を詠みかけ、手厳しく撥ねつけられた哀れな貴族だったか、

それとも貴婦人を崇め讃えた中世南仏騎士だったかもしれないな。

わが恋は、トゥルバドゥールの「遙か彼方からの恋」、幻影の愛、

恋人たちは往古の佳人、古典詩の記憶の中に生きる女人たち。

かつてわたしの心を強くとらえた、遠き世の詩人たちよ、

孤独者の生涯を癒し、詩の調べで心を満たした人々よ、

後の世の東海のお骨がおんみたちとその詩を想って、

衰老の日々に響かせたかそけきれそなんていあに

遠きあの世からしばし耳傾けたまえ。Chaire.